

# 慢性肺疾患の減少に向けたポジショニング統一の効果

An effect of the positioning unification for the decrease in chronic pulmonary disease

西4階病棟

尾上綾 藤井美香 内山直美 齋藤昭子 上條陽子

〈要旨〉当院のNICUでは、今年度、慢性肺疾患の減少に向けての取り組みを行った。その一環として、看護スタッフ間でのポジショニング統一を目的に、3つの取り組みを実施した。その結果、看護スタッフのポジショニングに対する知識面は向上したが、技術面には大きな変化がみられなかった。取り組みによる効果は、勉強会、検討会では高い結果となったが、ポスター掲示ではあまり効果が得られなかった。また、看護スタッフの主観では、児の呼吸状態や安定化サインにより変化を感じられる結果となった。

キーワード：ポジショニング，慢性肺疾患，安定化サイン

## I. はじめに

早産児は筋緊張の弱い状態にあり、重力、医療行為のために不良姿勢や不良運動パターンを強いられることが多く、このことが呼吸機能や運動の発達に悪影響を及ぼすと言われている<sup>1)</sup>。新生児集中治療室（以下NICUと略す）では、出生後の育児環境を母体内環境に近づけ、成長・発達を促すケアの一環として新生児のポジショニングを実施している。新生児におけるポジショニングは「体位変換」と「良肢位の保持」を目的に行われている<sup>2)</sup>。また、適切なポジショニングを行うことで、酸素化の改善・安定も期待される<sup>3)</sup>。ポジショニングは、循環動態が安定し、治療制限のないすべての児が対象となる<sup>2)</sup>ため、NICUでの看護においては日々必要なケアとなる。しかし日々行われているケアではあるにもかかわらず、当院のNICUではポジショニングに対する明確な手順は定められていない。そのため、NICUスタッフによって、ポジショニングの手順や技術・知識に差が出ている現状がある。

当院のNICUでは今年度、医師とともに「周産期医療の質と安全のための研究」の一環として、慢性肺疾患の減少を目指している。その活動の一つとして、児の呼吸状態の安定化を目的に、ポジショニングの統一を目指すこととなった。ポジショニングの統一に向けての取り組みと、看護師の意識変化・児の呼吸状態の変化をまとめた。

## II. 目的

本研究の目的は、NICUスタッフのポジショニング手技、技術を統一することによって、NICUスタッフの知識・技術面の変化と、児の呼吸状態がどのように変化するかを明らかにする事である。

〈用語の定義〉

ポジショニング：児を胎内環境に近い屈曲・正中位に保ち、囲い込みや包み込みを行うこと。  
安定化サイン：自律神経系、運動系、状態系（睡眠と覚醒）、相互作用にみられる児の安定を示す反応。規則的な呼吸、はっきりした覚醒、深い睡眠、自然な姿勢と筋緊張などがある。児の呼吸状態を評価する指標の一つとして用いられている。

## III. 研究方法

### 1. 調査期間

平成24年8月13日～平成24年12月13日

### 2. 対象

信州大学医学部附属病院NICUに勤務する看護師および助産師19名

### 3. 方法

1) ポジショニング統一に向けて4つの取り組みを実施。

(1) ポジショニング手順の作成

(2) 勉強会（良肢位・体位変換の手順・安定化サイン）

- (3) ビデオを使用した検討会（3名のNICUスタッフがポジショニングをしている様子をビデオに撮影し、良い点・改善点について検討）
  - (4) ポスター掲示（良肢位の写真・ポジショニング物品の作り方・体位変換の方法のポイントと手順）
- 2) 1の取り組み開始前後で、NICUで働くスタッフにポジショニングに対する意識調査を実施。意識調査の内容は、当院でのポジショニングの統一程度について、ポジショニングに対する知識、技術面での自己評価、取り組みによる効果、児の安定化サイン・呼吸状態のスタッフ評価とした。また、ポジショニング統一の程度について、ポジショニングに対する知識、技術面での自己評価は前後で比較を行った。

#### IV. 倫理的配慮

アンケートは無記名とし、個人が特定されないようにした。本研究は、信州大学医倫理委員会の承認を得ている。

#### V. 結果

信州大学医学部附属病院のNICUで勤務する看護師および助産師を対象にアンケート調査を行った。

回収数19名の内、有効回答数は16名であった。

#### 1. 看護師・助産師の取り組み前後での自己評価の変化

10段階で評価したものを平均し、前後での変化を比較した。

体位変換の知識は、6.8点から7.1点へ、良肢位の知識は6.5点から7.1点へ、ホールディング時間についての知識は6.4点から7.5点へと平均値が上昇した。一方、体位変換技術に対する自信は、5.3点から5.4点、良肢位保持に対する自信は、5.6点から5.7点へと大きな変化はみられなかった。また、ポジショニング物品作成に対しての自信は、6.1点から6.8点へと上昇した。

また、当院NICUにおいて、ポジショニングの手順がどの程度統一されていると感じるかとの問いでは、取り組み前5.7点から取り組み後6.8点へと上昇した。

#### 2. 取り組みによる効果

知識の向上に一番効果が得られた取り組みは勉強会であり、全員が7以上と評価し、平均点は8.6点となった。続いて検討会、ポスター掲示の順となった。技術の向上に効果が得られた取り組みは、勉強会・検討会であったが、それぞれ4名のスタッフが5以下と回答した。ポジショニングの統一に効果が得られた取り組みは勉強会・検討会であり、次いでポスター展示の順となった。全取り組みを通してポスター展示は効果が得られにくい結果となった。

#### 3. 児の状態の変化

看護スタッフの意識変化

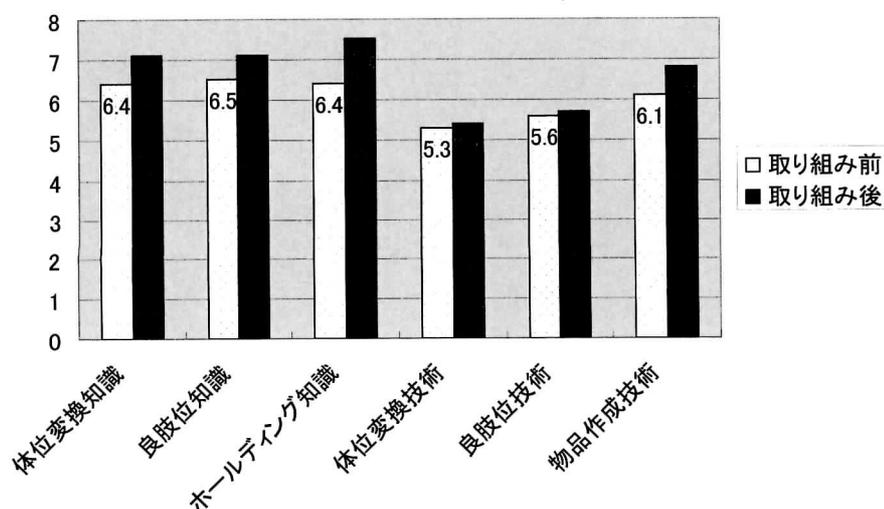


図1

児の呼吸状態の変化では、よい変化があった6名(38%)、悪い変化があった1名(6%)、変化なし9名(56%)と、変化なしの回答が一番多い結果となった。よい変化があった理由としては、体動による血中酸素濃度の変化が減少した(6名)規則的な呼吸になった(1名)児が落ち着く(1名)が挙げられた。悪い変化としては、呼吸が不規則になる(1名)が挙げられた。

変化なしの理由としては、以前からポジショニングを実施しているため変化は感じられなかった(1名)が挙げられた。

児の安定化サインの変化では、よい変化があった9名(56%)、悪い変化があった1名(6%)、変化なし6名(38%)と、よい変化があったとの回答が一番多い結果となった。よい変化の理由としてはストレスサインが減少した(6名)児が落ち着いている(3名)ケアの回数が減少した(1名)スタッフ全員が児の状態が不安定なときにすぐに対応できるようになった(1名)が挙げられた。悪い変化の理由としては、落ち着かない・起こしてしまう(1名)が挙げられた。

## VI. 考察

今回の取り組み前後で、ポジショニングの統一の程度についてのスタッフ評価が上昇していることから、今回の取り組みはポジショニングの統一に効果があったと考えられる。特に勉強会・検討会ではその効果が大きかった。また、取り組み前後での看護師の知識面での自己評価は、体位変換、良肢位、ホールディング時間の

全項目で上昇をしており、それぞれの取り組みによる知識面での向上の効果が得られたことが考えられる。一方、技術の向上への効果は、勉強会では7.2点、検討会で7.3点、ポスター掲示で6.6点と低い結果となり、自己評価でも取り組み前後で大きな変化はみられなかった。調査期間が短かったこと、対象となる児が少なかったことが技術の向上に効果が得られにくかった原因の一つと考えられる。したがって、今後も引き続き技術の向上に努めていく必要がある。ポスター展示ではポジショニング統一、知識・技術の向上への効果が得られにくい結果となったが、これはポスター展示期間が短かったこと、スタッフにポスターを見る習慣がなかったことが背景に挙げられる。児の状態の変化では、「良い変化があった」が、児の呼吸状態では38%、安定化サインでは56%となり、統一したポジショニングを実施することによって児にとって良い効果をもたらしているのではないかと考えられる。一方で「悪い変化があった」との回答もあったため、今後も改良が必要である。

## VII. 結語

今回の取り組みはポジショニングの統一、知識の向上に効果がみられた。しかし、まだ十分な統一には至っておらず、今後も修正、継続していく必要がある。また、技術の向上に向けての取り組みも必要である。今回の研究では、ポジショニングマットの導入も実施する予定であったが、対象の児が少なかった事、その他の取り組みによる効果を調べるために未介入とし

ポジショニング統一の効果

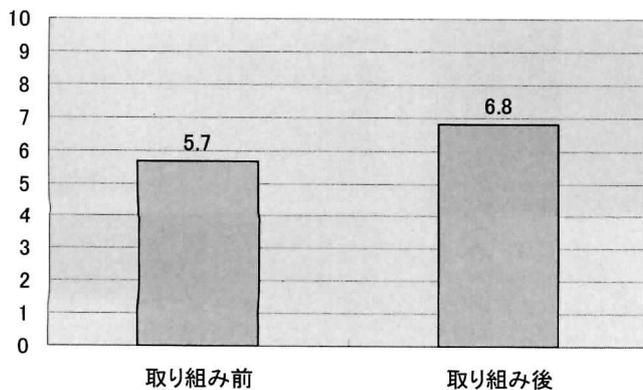


図2

取り組みによる効果

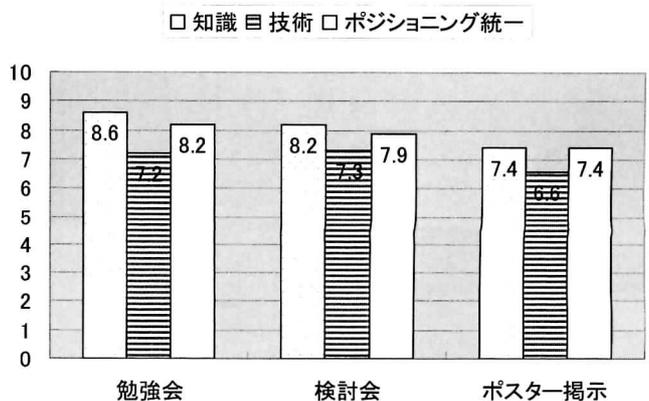


図3

呼吸状態の変化

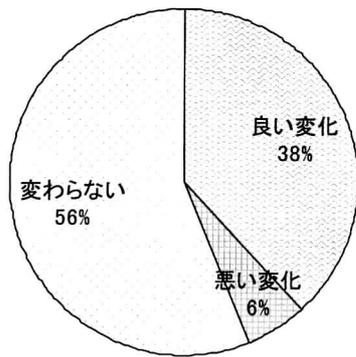


図2

安定化サインの変化

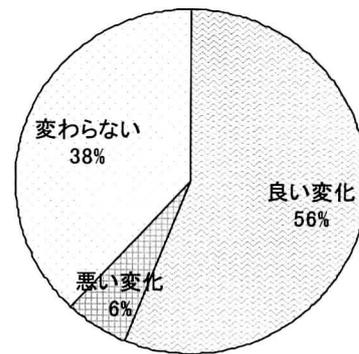


図3

ている。また、児の呼吸状態の変化をみるために児の血中酸素濃度と心拍数を調査しているが、対象者が少なく、十分なデータが回収できなかった。今後はポジショニングマットの導入と共に、血中酸素濃度と心拍数による児の呼吸状態の評価も実施していく。

#### 引用文献

- 1) 領家克子, NICUにおけるディベロップメンタルケアの実際. Neonatal Care 2008 21 (10) 36-42
- 2) 木原秀樹, ポジショニングとハンドリング第二章. Neonatal Care 2009秋季増刊 158-178

- 3) 木原秀樹, ポジショニングと(良肢位保持)と体位変換. Neonatal Care 2009 秋季増刊 169-173
- 4) 河井昌彦, 11章低出生体重児を看護する. 看護師のための必修知識 金芳堂 2007 134-153
- 5) 木原秀樹, ポジショニングとハンドリング第二章. Neonatal Care 2009秋季増刊 56-157

#### 参考文献

- 岡園代, ストレスサインの見方. Neonatal Care 2011秋季増刊 24-33